とる僅かに4回』とあるのは、どのような資料によったのかわからない。

注(3) 昔の節会〔せちえ〕相撲力士の最上位の称、後世の大関にあたる。

資料　宮城県史第18巻

仙台市史第1巻

仙台人名大辞書（菊田定郷）

仙台郷土史夜話（三原良吉）

仙台と相撲（三原良吉）

近世名力士伝（安藤英男）

仙台昔話電狸翁夜話（伊藤清次郎）

## 60.　仙台の達磨を松川達磨と呼ぶのは

**問**　仙台の達磨を松川達磨と呼ぶことがあるのは何故ですか。

**答**　「仙台事物起原考」（菊地勝之助）には次のように記されています。『仙台地方の旧家を訪ねると、神棚などに大小幾つかの達磨をずらりと並べ祀っているのを見ることである。これが仙台特産の松川達磨である。この達磨は藩政時代、伊達藩の藩士松川豊之進の創作したものといわれている。そしてそれ以来、藩内の小禄の藩士らの内職として製作したものらしいが、その技術と構造形式とは共に独特なもので、特にその着色と表情とがよく統一された絢爛たる郷土作品である。顔は眉毛だけ毛を植え、眼玉は玻璃を入れてあり、体の部分は赤地に福神とか宝船・梅の花などを描いている。小は三・四寸から大は三尺に及び各種の型があり、かっては例年の歳の市・仲見世とか、岩沼の竹駒神社の祭典の折などに売出されたものである。これは郷土玩具としてよりも、むしろ信仰の対象として大衆から愛玩されている。』だから松川達磨と呼ぶのであると、一般には伝えられています。

ところが、関善内氏の専門的な研究によると、松川達磨の名は近年になって呼び始められたもので、以前は単に達磨とだけ言われていたということです。その調査の結果では、松川達磨というのは、昭和に入ってからの呼び名であり、松川豊之進という人物の存在そのものが疑わしいといわれます。そして、達磨そのものが独特の構造と技術、描彩の着想や表情が今日見られるように完成したのは、明治初年面徳の改良によるものなそうです。それ以前の達磨は、赤衣に宝珠が白く描かれただけの単純なもの[(1)]でした。このことから、創作者松川豊之進の姓を取ったという説は否定的です。

また別説に、松川で作られたから松川達磨と名付けたといわれる場合もありますが、これも根拠が薄く、いずれにしても松川の名の起原については疑問が多く、今のところ全く不明であると結論しています。そのほか、同様の見解に立って「郷土玩具の種々相」（有坂与太郎、昭和6刊）に『松川達磨の松川といふ名称の起因する所は明瞭でないが、いつ頃から誰によって言ひならされたか伊達藩の松川豊之進が創案したものの如く伝へられてゐるが、所詮は捏造された臆説であって信ずるに足らない。……』。「郷土玩具事典」（斎藤良輔）に『松川達磨の呼び名は比較的新しく……昭和期以前までは面徳達磨・仙台達磨とも呼んでいた』。「だるま」（徳力富吉郎）に『仙台だるま』。「日本の郷土玩具・東北」（薗部澄）にも『土地では殊更に松川達磨とは呼んでいません』と述べられたものがあります。

注(1)　面徳といわれた工人で、本名は高橋徳太郎、天保元年（1830）江戸人形町に生れた。親ゆずりの仏師ですぐれた技倆をもち、殊に神楽面や能面を刻んでは当時第一人者といわれ「面徳」の名が高かった。安政年間仙台に来住し、田町の高橋綿屋の婿養子となり高橋の姓を名のった。明治維新後、徳太郎は副業として達磨作りを始めた。彼は持前の感覚を発揮して、従来のものとは全く面目を異にした達磨を創作して世に出したところ、「面徳達磨」と呼ばれて、忽ち人気を集めるに至った。彼の長男利三郎は大工が本業だったが、冬季間は親子で「面徳達磨」作りをするようになった。彼は彫刻にもすぐれた腕を見せた。現在の工人が今もって使っている達磨の木型は、殆ど彼の作品である。このようにして面徳一家は繁昌したが、大正8年の南町大火で焼失した上、不幸がたび重なって没落し、家業も廃絶してしまった。現在残っている工人としては、面徳系2軒と本郷系2軒だけである。そのうちで一番著名なのは通町北七番丁の本郷家である。当主徳久氏が4代目の工人である。その高曽祖父久三郎が明治維新の変動で禄を失い、瓦職人に転業した。瓦屋は冬季に入ると休業になるので、その間に達磨作りを副業として始めた。その子久治郎も家業を継いだ。明治の半ば頃現在の北七番丁に移った。その子徳治の代に瓦職をやめ、張子専門となった。徳治は昭和46年12月2日、84才で歿するまで、黙々と達磨作りに励んでいた。昭和5年に仙台市勧業課商工係が実施した「仙台市の家内工業調査」の文書綴に『達磨製造、本郷徳治、11～1月だけ就業、他は自由労働に従事……』。他に達磨作りを副業とするもの3軒あり、松川達磨などの呼び名は勿論見られない。

資料　仙台達磨（関　善内）